

毎日実家の手伝いをしながら家族の情報を待っていたところ、翌年七月頃、突然電報があった。「母は京城にて死亡、伝染病発生のため、佐世保沖に停泊中」。私は子どもを迎えにいった。子ども達は、母の遺骨を胸に抱いて顔をみせた。涙の対面がやっとできたのだ。

このせつない思い出は、なんとも言い表すことはできない。

私の持っていた食べ物を与え、他の二、三家族にも少しずつ分け与え喜んでもらった。子ども達は、ぼろぼろの服装で乞食同然だった。京城まで朝鮮人から食べ物をもらい、やっとたどり着いたとのこと。一番下の子が病気になる、一足遅れて帰ることにした。妻は腸カタルになり、死亡したとのこと。私はこれを聞き、あのとき日本に帰せば良かったと男泣きに泣いてしまった。

子ども四人が実家に着いてからは、早朝から実家のために手伝い、食べるために励んだ。その後、あき家を見つけ、そこに住み、後妻をもらい生活を営んだ。終戦当時の食糧の配給では腹がへるので、仕方なく、なれない山仕事（木炭焼き、そり引き）をやった。そのうち、大

熊町に原子力発電所の建設が始まり、賃金は増加し、生活は楽になった。子ども達は大きくなり、社会人となって一人立ちできるようになった。

今までのものすごい苦労の甲斐あって、生活に恵まれてきた。

私は、今年敬老の日（誕生日）をもって満八十二歳を迎える。今からふりかえれば、人生はなんと変転きわまらないことか。まるでドラマのようにも思える。心の余裕ができたからだと思う。

これからは、余生をたいせつにして過ごそうと思っている。

家族七人ぶじ帰国

群馬県 中洲 武八

誰も忘れることのできない八月十五日、この日の終戦の詔勅を、南朝鮮の慶尚北道の竜党という、小さい街の自宅で聴きまして涙を流しました。

私はここで家を持ち、六人の子女をもうけ育てまして、自分もこの地に骨を埋めるつもりで暮らしてきたのです。

当初は、引揚げなどは考えられませんでした。増しに日本人に対する風あたりは強くなり、石等を投げこまれたり、嫌がらせなど増えてきました。日本人は皆引揚げるほかは無いです。私も引揚げる準備を始めました。

役場の職員や、警察官等のうち、徴用や供出等で働いて、朝鮮人間で評判の悪かった人は日鮮人問わず、街から姿を消すようになりました。

私の家などにも猟銃をくれとか、いろいろの物を譲ってくれと強要され、家族の者は恐れおびえて私は外出もできなくなりました。

またある日、朝鮮人がたずねてきて、親切ごかしに物を持ってきて、残していく土地や家屋等の管理を任せてくれないかとか、難題を持ちこまれ、たいへん困りました。

ある朝、夜が明けると、門を開けて家に荷車が持ちこ

まれました。なんだと聞くと、今度私がこの家にはいることに昨夜村の会議できまったので荷物を置いてくれと、荷物を持ちこまれました。

無法をどこへ訴える先もありません。警察の機能はとまり、駐在所の巡査は一人もいなくなり、警察のない社会がどんなにかこわいものか、治安の確保について初めて知らされました。

その夜から荷物を置いた部屋に、十人あまりの人達が集まり、バクチを始め、フスマ一枚をへだてて寝ている私たちは一睡もすることができませんでした。

街の一画にありました百坪ほどの土地と、六棟の家屋が捨て値の二万円あまりで朝鮮人に売り渡し、登記も終わり、代金も受け取りましたのですが、数日後布令が出て、日本人の財産の買取りは禁止されたので、売約を取り消し、代金を返せと強要され、いたし方なく返金しました。

このような場所には一日もおられないので、いそいで家を捨て、引揚げる決心ができましたので、二台の牛車を雇い、荷物を積みこみ、六人の家族を連れて逃げるよ

うに夜明けとともに家を出ました。

手荷物を預け、釜山行きの汽車に乗るために、その夜は駅ホームで夜を明かし、翌日は宿を探し無理に頼んで一泊、翌々は各地より押し寄せるたくさん引揚げ者とともに、収容所に入れてもらいました。

収容所は学校の教室で、ここで五、六日待ち、ようやく連絡船に乗ることができ、忘れもしない十月九日の朝、博多港に上陸。

夢に見た祖国日本、戦いに敗れても、私達には、祖国があると涙を流して喜びました。博多の駅近くに宿をとって二泊して、東京行きの列車にりましたが、山陽線が水害のため、山口県の柳井駅下車、伝馬船に乗り換え、尾道まで瀬戸内海を船で行き、尾道駅から東京行きの列車に乗り、途中京都駅に下車、一泊、ここで食糧等を手に入れて、背負ってきた荷物を手荷物のチッキとして預け、目的地の千葉へ出発しました。

内房線の上総湊駅を下車、駅前の旅館に宿を取り、先に引揚げている家内の妹の実家を訪ねました。農業を始める約束でしたが、帰国したら耕作地を返してもらえ

ということであったが、終戦とともに小作人の心も変わり、返してもらえない見こみはなく、住む家は狭く、私達七人を受け入れる部屋もないので諦めて、生まれ故郷の群馬へ行くことにしました。

金古に住む弟の家に世話になることになり、引揚げ後やっと、足を伸ばして寝ました。

榛名山麓の相馬ヶ原旧陸軍演習場跡地に入植したのですが、米軍の接収で、立退きを余儀なくされ、現在地の吾妻町荻生の国有地の開放を受けて入植、現在にいたっております。

貨物船で脱出、帰国

東京都 召田 房江

二十年七月二十六日夫応召、船舶運営会朝鮮木浦支社勤務の当時は、撃沈された船員の救助に多忙な日々を過ごしていた。行先不明のままの出征。二日後の二十九日、次女誕生、三歳の長女と三人になり、すっぽりと穴があ